

氏 名	木下 未果子
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第 28 号
学位授与の日付	2017 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	"Separateness and Communication"/"Unity and Dispersity" —George Eliot と Virginia Woolf が描く「個」と「集合体」—
論文審査委員	主 査 教 授 向 井 秀 忠 副 査 教 授 近 藤 存 志 副 査 教 授 由 井 哲 哉 副 査 大妻女子大学短期大学教授 窪 田 憲 子

## 論文内容の要旨

本論文の目的は、ヴィクトリア朝リアリズム作家ジョージ・エリオット( George Eliot, 1819-1880 )と 20 世紀モダニズム作家ヴァージニア・ウルフ( Virginia Woolf, 1882-1941 ) という時代や小説技法の顕著に異なるふたりの作家の間に潜在する、「個」と「集合体」に関する問題意識の共通性を論証することにある。奇しくも、両作家はそれぞれ最後の長編小説において、次のような共通の概念をキーワードとして提示する。それが、本論文の表題に掲げた、エリオットの *Daniel Deronda*( 1876 )に於ける “separateness and communication” であり、ウルフの *Between the Acts* ( 1941 )に於ける “unity and dispersity” である。これらの語は、各人の「個」がいかにして、自律を保ちつつ、「集合体」の一員として他者との共存を果たし得るのか、そのバランスのとり方が、その先の個人的人生や人間社会全体の可能性にどのように影響するのか、という両作家の問題意識を象徴的に表現している。本論文では、2 人の作家のこのような問題意識を基軸に据え、具体的には自我意識と社会的因習との葛藤、ジェンダー、階級、世代など社会通念が固定化する境界の超越、個々人の人生と集合体としての人間社会全体の歴史との相関関係などに視座をおいて作品分析を進め、両作家それぞれの見解の特徴を浮き彫りにすると同時に、2 人に時流の変化を超越した作家としての意識の共通性があることを明らかにする。

分析と論証を進める上で、ハンナ・アレント( Hannah Arendt, 1906-1975 ) の公共論の一部を用いて本論の柱となる議論の明確化を図った。人間が人間らしく生きるための条件としてアレントが掲げた主張の一部が、エリオットとウルフの作品から読み解ける主張と基本的に一致すると考えられるからである。アレントが「公的」( “public” ) と「私的」( “private” ) という概念を定義する上で強調した「多様性」の重要性と「孤独」の危険性、「物語り」や「芸術表現」による経験の共有と共通世界の構築、「社会」が個人に強要する画一主義、公的/私的領域の枠外に在る「親密性の領域」等の考え方が本論を展開する上での補助線として有効であった。

本論文は 3 部 6 章からなり、各部異なった切り口からエリオットとウルフの作品を 1 作ずつ取りあげて分析する。第一部「社会通念と自己の『現れ』」では、社会通念と個人の自己認識、および自己表現の関係をテーマに論じる。家族や地域社会、あるいは知人同士の集まりという身近な集団世界で年月をかけて人々の間に浸透してきた社会通

念は個人の個我の自由な発散を阻む。そうした現実をどのように打破して自己を外に現していくか。第1章、*Adam Bede* (1859) では、Hettyの嬰兒殺しという想定外の事件とその後に生じた社会の混乱の原因をDinah Morrisと村人たちの事件に対する対応の相違から探る。公的な領域では、男たちが社会から課せられた画一的な価値観に縛られ危機に際して全く無力である。私的な領域では、家庭周辺の世界しか知らない女たちの意識の狭小さが目立つ。これらは、集約すれば、アレントが重視した「多様性」の欠如に因るものといえる。為す術もなく混乱する村人たちの中であって、アレントのことばを借りれば、Dinahは彼らの「物語り」を引き出し、「聞く」ことに徹する。エリオットは、一義的な社会通念に囚われない柔軟な思考、差異の受容、他者への共感力といったDinahの特性に、「多様性」が欠如した村社会を再生させる鍵を託した。

第2章、*To the Lighthouse* (1927) では、ヴィクトリア朝の「家庭の天使像」が女性登場人物たちの生き方にどのように影響しているかを分析し、中でも、その残影を背負いながらも、絵を描くことを通して他の女性たちが果たせなかった自己実現を達成したLily Briscoeに注目する。Lilyは、過去を自己の内部で反芻し、距離をおいて客観的に理解するようになる。ウルフが「トンネル掘り」とよんだこのような過程を通じて、過去の出来事を多角的に捉え、現在につながる意味を把握する。彼女は「家庭の天使」を殺すのではなく、包含しつつそれを超越し、納得のいく自己像と新しいヴィジョンの構築に成功するのだ。Lilyは自分の過去と現在を絵画という芸術作品に、アレント流に言えば「物化」することで普遍性と永遠性を与えた。ここに芸術の可能性に対するウルフの期待をみる。

第二部、「到達する新領域」では、移動の繰り返しを通して「多様性」を体得した主人公が既存の公的/私的の両領域が孕む種々の欠点を知り尽くした末に、自らの居場所として新しい独自の領域を築くという共通のプロットが潜む点に注目する。第3章、*Romola* (1863) では、主人公は私的領域と公的領域を往還して、両領域に個人の精神を蝕む危険な要素が内在することを認識する。私室からフィレンツェの街、さらにはペストの蔓延する未知の村へと移動を重ねながら多種多様な人々の生き様に接し、そこに「多様性」を認識し、他者の痛みや困窮に対する直感力、共感力、判断力を身につける。最終的に、彼女は友愛の信念に基づいて、夫の愛人母子や高齢の叔母との共同生活の場を築き、そこを自らの居場所とする。この家は、アレントが公私の領域の枠外に位置づけた「親密性の領域」と重なり、人間同士の共感の力への作者の期待を表象するものと考え

られる。

第4章、*Orlando: A Biography* (1928) は400年という長大な時間とイギリス内外の広大な空間を舞台とし、ジェンダー、階級、職種、民族など様々な既成枠の越境と、公/私の領域の往還を含む比類なくスケールの大きな移動の物語だ。この移動は、帰属の曖昧な主人公にとって、アイデンティティ追求の旅である。主人公の自他への認識は次第に多様化し、最終的には規制社会から距離をおいたアウトサイダーとしての立ち位置が確立し、生涯の課題であった詩作にふさわしい居場所を獲得する。これは、夫と妻それぞれの性別さえ曖昧な、互いを束縛しない、信頼と愛によってのみ持続する新しい形の結婚によって築かれる新領域である。*Romola* の場合と同様、これも「親密性の領域」に匹敵するものであり、ウルフが芸術家の創作活動にとってどのような環境が適切だと考えていたかを例証するものだ。

第三部「分散した『個』から『共通世界』の構築へ」では、個々人の内面が民族や国家、国際関係など大きな規模の集合体からの影響を受け、人々が集団の中での自分の位置づけに困難を覚えているという設定に注目する。大きな集合体内でばらばらに分散した「個」をどのようにつなげていくか、その道の模索が共通のテーマである。第5章 *Daniel Deronda* (1876) では、Gwendolen と Deronda のアイデンティティの模索という個人的テーマと、民族の自立と他民族との共存というユダヤ民族全体に関わる大きなテーマの二つが重層的に盛り込まれている。Gwendolen と Deronda は、多様な経験や人との出会いを経て、自らの実像を認識し、それを他者に向けて「物語り」、「聞く」ことによって新たな人生を切り拓くのだが、その過程を根底で支えるのが、彼らが自覚したルーツの存在である。エリオットは著作を通しルーツの重要性を繰り返し強調するが、本作品においても、個我を守る孤高性と、他者との連帯の双方をバランスよく両立させるため、ルーツの認識が要となる。アレントは、「共通世界」の介在が人と人の間に適度な距離を保って自律と融合の均衡を確保すると説いたが、まさに本作では、ルーツが、個人と民族のいずれのレベルにおいても、「共通世界」としての働きを示すのである。

第6章、*Between the Acts* (1941) では、第二次世界大戦開戦直前という執筆時の背景が作品に及ぼした影響は色濃く、作中人物たちは時勢の大きなうねりの中に巻き込まれざるを得ない状況にある。先行き不明瞭な不安定な状況下、人々の意識が分散し相互のつながりが希薄である中で、孤立した個々の個我の相違を生かしつつ、どのように

つなげるかが課題となる。La Trobe のパジェントは、政治的プロパガンダや特定宗教でなく、文学を通して解決への道を探ろうとするウルフの試みを示唆する。このパジェントは、従来型のもののようにパストラルへの回帰を目指すのではなく、原始への回帰を仄めかす。多種多様な無名の人々が性別や社会的地位、民族などの区分によって制約を受けることなく、ありのままの姿で融合しつながって一つの物語を紡ぐというイメージだ。観客たちもいつのまにか当事者の一部として劇に入り込み、皆が同じルーツに根ざした歴史の一部であるという感覚を共有する。この試みは、アレントのいう「共通世界の構築」への一歩として捉えられる。

エリオットは人間の共感の力を重視し、ウルフは芸術の力を重視するという相違はある。しかしながら、以上の6章にわたる作品分析を通し、この二作家が共に、多様性の受容、適度な距離、社会通念にとらわれない自由な自我の発散、ルーツの認識に基づいた共通感覚などに主眼をおき、個の自律と共存の調和のとれた人間社会の構築を著作によって追求していることが明白となった。この点において、時代やスタイルの違うこの二人の作家が、実は問題意識とその解決への方向性においてきわめて近似しているということが検証されたのである。

## 審査結果の要旨

木下未果子氏の博士学位申請論文「“Separateness and Communication” / “Unity and Dispersity” : George Eliot と Virginia Woolf が描く『個』と『集合体』」は、イギリスの19世紀ヴィクトリア時代を代表するリアリズム作家であるジョージ・エリオットと20世紀前半にモダニズム作家として大きな影響を与えたヴァージニア・ウルフの「つながり」について、副題にある「個」と「集合体」をキーワードに論じたものである。

木下氏の論文の着想は、エリオットとウルフの作品を読み通していくうち、両者には先のような一般的な印象に基づいた説明では十分に表現することができない、より深遠な「つながり」があり、それを通底としてイギリスにおける小説史の流れの伝統が形成されているのではないだろうか、という「気づき」から始まっている。エリオットが小説『ダニエル・デロンダ』で用いた“Separateness and Communication”と、ウルフが小説『幕間』で用いた“Unity and Dispersity”をキーワードに、ドイツの思想家ハンナ・アーレントの“public”（公的）と“private”（私的）、“story-telling”（物語ること）、「親密性」の議論などを援用しながら、自己と他者の関係性について着目しながら論じ、手法は異なるこの二人の作家の問題意識が根底でつながっていることを示している。このように、これまではあまり学術的に論証されることのなかった二人の作家の「つながり」を整理し、英文学研究の文脈において明確にすることを試みた野心的な論文であるとまとめることができる。

最終試験として、4名の審査員による口頭試問を行い、改めて本論文について検討を行った。口頭試問を通して、本論文が、テーマの有意性、方法論、議論の展開の仕方、そして導き出された結果においてすぐれていることは審査員全員で一致することが確認された。口頭試問の場においては、論文としての改善点がいくつか指摘されたが、いずれも本論文の評価において決定的な問題となるものではなく、木下氏の議論をより効果的に展開するためのアドバイスとして出されたものであった。

審査委員会の結論としては、明確な問題意識とテーマの設定、緻密で丁寧な作品分析、文学論だけでなく社会学や現代思想などの膨大な先行研究を踏まえた論証に対する評価に揺るぐところはなく、審査の過程において、終始一貫、本論文に対する評価は高く、博士号を与えるに十分に値するという判断は安定したものであった。

審査委員（向井秀忠 [文責]・窪田憲子・近藤存志・由井哲哉）